

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和5年2月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万4193トン、前年同月比98.9%、価格は1キログラム当たり265円、同100.4%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万5438トン、前年同月比109.7%、価格は1キログラム当たり228円、同94.2%となった。
- 4月の見通しは、各品目ともに春野菜となり、産地も交代の時期を迎える。各産地とも他産地の動向をみながらの出荷となると予想され、価格は引き続き前年をやや上回ると予想される。

(1) 気象概況

上旬は、天気は数日の周期で変化した。東・西日本日本海側では、晴れた日もあった一方、北・東・西日本太平洋側では曇りや雨または雪の日があり、10日は南岸低気圧の影響で北・東日本太平洋側を中心に積雪となった所があった。旬平均気温は、東・西日本では、寒気の影響を受けにくかったため高く、北日本では平年並だった。旬降水量は、北・東・西日本太平洋側で多かった。北・東・西日本日本海側では平年並だった。旬間日照時間は、北日本太平洋側と東・西日本日本海側で多かった。東・西日本太平洋側で少なかった。北日本日本海側では平年並だった。

中旬は、北・東・西日本では、高気圧と低気圧が交互に通過したが、期間の中頃は冬型の気圧配置が強まった日があった。18日から19日にかけて、東・西日本日本海側を中心に低気圧や前線の影響でまとまった雨が、19日から20日にかけて北海道地方を中心に低気圧の影響でまとまった雪が降った。このため、北日本太平洋側と東・西日本日本海側の旬降水量は多く、東・西日本日本海側の旬間日照時間は少なかった。全国的に期間の中頃は寒気の影響で平年を

下回った日があったが、期間のはじめと終わりは寒気の影響を受けにくく、暖かい空気が流れ込んだ日もあったため、東・西日本の旬平均気温は高かった。北日本では平年並だった。旬降水量は、北日本日本海側と東・西日本太平洋側では平年並だった。旬間日照時間は、北日本日本海側と北・東・西日本太平洋側では平年並だった。

下旬は、24日頃に本州南岸を前線が通過したほかには、全国的に低気圧や前線の影響を受けにくく、高気圧に覆われやすかったため、旬降水量は全国的に少なく、特に東・西日本日本海側と東日本太平洋側ではかなり少なかった。また、期間のはじめと終わりに冬型の気圧配置が強まった日もあったため、旬間日照時間は西日本太平洋側でかなり多かった。寒気の影響を受けやすい時期があったため、西日本の旬平均気温は低かった。旬平均気温は、北・東日本では平年並だった。旬降水量は、北日本日本海側、北・西日本太平洋側で少なかった。旬間日照時間は、北・東日本太平洋側と東・西日本日本海側で多かった。北日本日本海側では平年並だった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り(図1)。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側
東日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	
西日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	

資料：気象庁「2月の天候」

1 平年を上回る水準			
2 平年並み			
3 平年を下回る水準			

(2) 東京都中央卸売市場

2月の東京都中央卸売市場における野菜の入

荷量は10万4193トン、前年同月比98.9%、価格は1キログラム当たり265円、同100.4%となった(表1)。

表1 東京都中央卸売市場の動向(2月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	104,193	98.9	92.4	265	100.4	105.9	263	267	265
だいこん	8,680	99.2	90.0	101	94.3	101.0	100	102	101
にんじん	5,954	100.0	99.7	126	134.6	97.9	126	128	125
はくさい	11,189	89.3	89.8	63	122.0	94.1	54	68	70
キャベツ類	14,417	96.0	95.3	95	93.9	92.5	99	93	91
ほうれんそう	1,489	110.8	96.8	502	96.9	109.3	544	481	473
ねぎ	4,440	110.6	109.8	253	84.6	75.3	249	253	259
レタス類	5,959	109.6	91.8	261	89.7	113.9	281	260	239
きゅうり	4,094	97.8	88.6	449	107.6	112.5	498	422	420
なす	1,418	101.0	95.6	484	101.9	97.7	560	468	437
トマト	4,487	97.6	90.5	400	108.7	107.7	397	397	409
ピーマン	1,410	102.6	101.2	825	103.8	108.3	829	819	826
さといも	467	92.5	93.1	323	112.4	101.1	321	322	326
ばれいしょ	6,958	109.7	97.3	152	60.4	97.6	152	149	156
たまねぎ	9,331	110.2	95.2	137	66.0	105.4	136	139	136

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、だいこんの価格が、月間を通して安定した動きとなり、やや高めに推移した前年をやや下回り、平年をわずかに上回った(図2)。

葉茎菜類は、キャベツの価格が、下旬に向けてやや落ち着いたものの、大きな波はなく、前年、平年ともかなりの程度下回った(図3)。

果菜類は、ピーマンの価格が、月間を通して

堅調に推移し、高めに推移した前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った(図4)。

土物類は、たまねぎの価格が、大幅に高めに推移した前年を3割以上下回り、平年をやや上回った(図5)。

なお、品目別の詳細については表2のとおり。

図2 だいこんの入荷量と卸売価格の推移

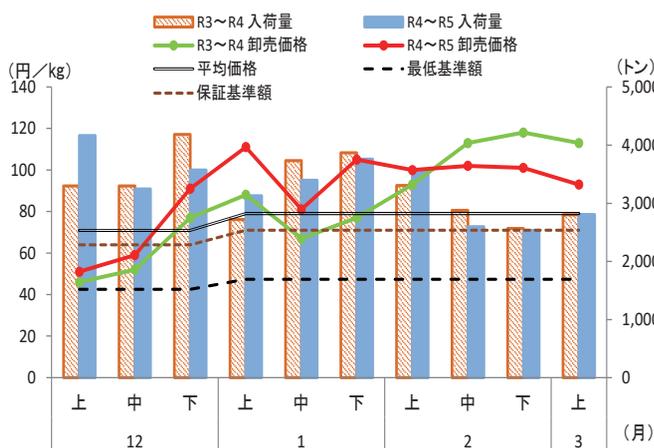


図3 キャベツの入荷量と卸売価格の推移

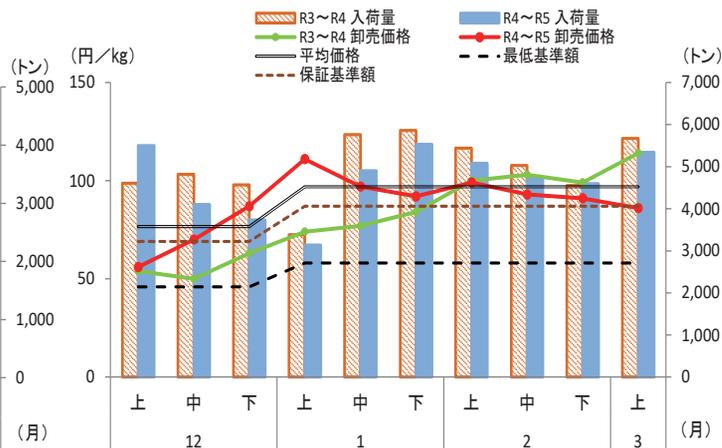


図4 ピーマンの入荷量と卸売価格の推移

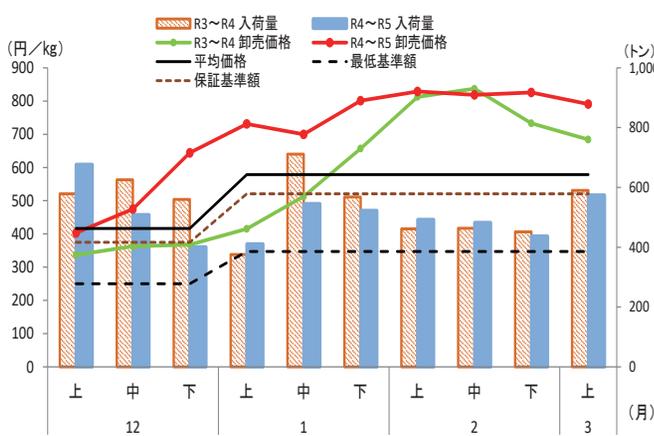
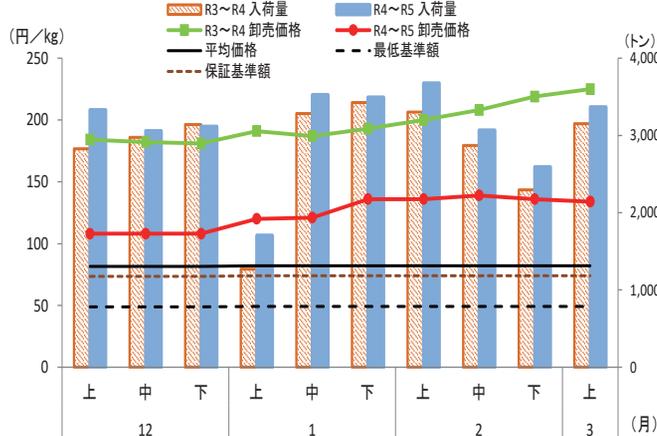


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6力年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	2月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>神奈川県産、千葉県産中心の入荷となった。神奈川県産の作付面積は前年をやや下回る。1月の降水量が少なく、気温も低かったため肥大が停滞し、7～10日程度の遅れが見られ、病害も散見されている。千葉県産の作付面積は前年並みで、低温・干ばつの影響で生育はやや遅れており、凍害も散見された。総入荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年を1割下回った。</p> <p>価格は月間を通して安定した動きとなり、やや高めに推移した前年をやや下回り、平年をわずかに上回った。</p>
	にんじん 	<p>千葉県産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、根部の肥大は良好。年明け以降、肥大は落ち着き、干ばつの影響は少ない。総入荷量は前年並みであった前年並みとなった。</p> <p>価格は月間を通して安定して推移し、大幅に安めに推移した前年を3割以上上回り、平年をわずかに下回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>茨城県産中心の入荷となった。作付面積は前年並みから一部減で、虫害は落ち着きおおむね順調。価格の低迷と労働力不足からやや出荷や管理意欲の減退が見られた。総入荷量は前年、平年とも1割以上下回った。</p> <p>中旬以降価格を上げ、安めに推移した前年を2割以上上回り、平年をやや下回った。</p>
	キャベツ類 	<p>愛知県産を中心に千葉県産の入荷があった。愛知県の作付面積は前年並みで、寒波で生育が停滞しているものの、気温の上昇に伴い回復傾向。千葉県産の作付面積は前年並みで、生育は前進傾向であったが、気温の低下により前年並みに戻っている。病虫害は少ない。総入荷量は前年並みであった前年をやや下回った。</p> <p>価格は下旬に向けてやや落ち着いたものの、大きな波はなく、前年、平年ともかなりの程度下回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>群馬産、茨城県産を中心に関東産の入荷となった。各産地の作付面積は前年並みで、生育もおおむね順調であったが、低温の影響により露地作中心に低温障害が散見された。総入荷量は少なめに推移した前年を1割強上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は中旬以降落ち着きを見せたものの、露地系統がやや減少したため、高めに推移した前年をやや下回り、平年を1割近く上回った。</p>
	ねぎ 	<p>千葉県産、茨城県産、埼玉県産など関東産地の秋冬作中心の入荷となった。各産地とも作付面積は前年並みだが、茨城県産は前年をやや上回る。低温・少雨により生育速度は緩慢も、各産地とも収穫は順調。一部病虫害の発生が散見されたものの、太りもよく作柄は良好。総入荷量は前年を1割強上回り、平年を1割弱上回った。</p> <p>潤沢で切れ目のない入荷となったことから、価格は安めに推移した前年を1割以上下回り、平年を2割以上下回った。</p>
	レタス類 	<p>静岡県産を中心に茨城県産、長崎産、香川県産などの入荷となった。静岡県産の作付面積は前年並みで、1月中旬まではやや干ばつ傾向も、気温が比較的高めに推移したことから停滞していた生育は前年並みまで回復した。茨城県産の作付面積は前年をやや下回り、年明け以降の低温・干ばつにより生育は遅延。長崎産の作付面積は前年並みで、低温・干ばつにより若干の生育遅延や病害が見られた。香川県産の作付面積は前年をやや下回り、降雨は少ないものの、日中の気温が比較的高めに推移したことから大玉傾向。総入荷量は少なめに推移した前年を1割近く上回り、平年を1割近く下回った。</p> <p>価格は下旬に向け落ち着きを見せ、高めに推移した前年を1割以上下回り、平年を1割以上上回った。</p>

果菜類	きゅうり 	<p>宮崎産を中心に群馬産、千葉産など関東産地の促成物の入荷となった。宮崎産の作付面積は前年並みで、低温の影響はあったものの、生育はおおむね順調。群馬産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も、低温・乾燥の影響により若干の遅延が見られた。千葉産の作付面積は前年並みで、年内の曇天、日照不足による生育遅延からは回復傾向。総入荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年を1割以上上回った。</p> <p>価格は月初の特売需要以降落ち着きを見せ、やや高めに推移した前年をかなりの程度上回り、平年を1割以上上回った。</p>
	なす 	<p>高知産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であったが、夜温の低下による肥大の遅延が見られた。またコナジラミの発生がわずかに見られた。総入荷量は前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は前月の高値が残った上旬から、下旬にかけて落ち着きを見せ、やや安めに推移した前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。</p>
	トマト 	<p>熊本産を中心に栃木産、愛知産などの入荷があった。熊本産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も、病害の発生がやや多く見られる。また1月の低温や曇雨天の影響により生育の差が生じている。栃木産の作付面積は前年並みで、8月下旬に定植したものと促成作型のもの共に生育はおおむね順調。一部で病害の発生が散見されるも軽微であった。愛知産の作付面積は前年並みで、生育は順調も低温により着色が遅延した。総入荷量は燃油高などの影響もあり少なめに推移した前年をわずかに下回り、平年を1割近く下回った。</p> <p>価格は月間を通してあまり大きな動きはなく、若干安めに推移した前年をかなりの程度上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	ピーマン 	<p>宮崎産を中心に茨城産、高知産、鹿児島産などの入荷があった。宮崎産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調。茨城産の作付面積は前年を下回り、1月までの低温により生育は遅延。高知産の作付面積は前年並みで、一部虫害が散見されるものの、発生は平年に比べ少なく、生育はおおむね順調。鹿児島産の作付面積は前年並みで、やや低温の影響があるものの、生育はおおむね順調。総入荷量は前年、平年ともわずかに上回った。</p> <p>価格は月間を通して堅調に推移し、高めに推移した前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
土物類	さといも 	<p>埼玉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、収穫は終了している。天候に恵まれ大玉傾向で、年内出荷の比率が上昇している傾向もあり、数量はやや落ち着いている。中国産の輸入は前年を3割近く下回った。総入荷量は前年、平年ともかなりの程度下回った。</p> <p>価格は安めに推移した前年を1割以上上回り、平年をわずかに上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>北海道産を中心に鹿児島産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫は終了し、貯蔵ものからの出荷となった。夏場の豪雨の影響とその後の曇天・干ばつにより、品質にばらつきがみられる。やや歩留まりが悪く、残量も少ない。鹿児島産の作付面積は前年並みで、離島は降雨による定植遅れに加え、多湿により一部病害が散見された。強風による風害も発生している。鹿児島本土の生育当初の干ばつによる小玉傾向の懸念は解消されている。総入荷量は少なかった前年を1割近く上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は大幅に高めに推移した前年を4割近く下回り、平年をわずかに下回った。</p>
	たまねぎ 	<p>北海道産を中心に静岡産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫は終了し、貯蔵ものからの出荷となった。夏場の天候の影響を受けた地域はあるものの、全体としては作柄良好で肥大も良好。静岡産の作付面積は前年並みで、前年末からの干ばつ傾向から、その後の降雨により生育は回復しているものやや緩慢。中国産の輸入は前年の4分の1強となっている。総入荷量は少なかった前年を1割強上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は大幅に高めに推移した前年を3割以上下回り、平年をやや上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

2月の大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万5438トン、前年同月比

109.7%、価格は1キログラム当たり228円、同94.2%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(2月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	35,438	109.7	99.3	228	94.2	102.9	221	228	238
だいこん	2,884	113.7	98.3	78	81.3	92.2	78	75	82
にんじん	2,209	100.3	102.5	123	146.4	105.1	129	120	117
はくさい	4,594	101.9	107.2	74	110.4	99.7	67	77	81
キャベツ類	4,800	119.0	106.6	89	89.9	95.2	91	88	87
ほうれんそう	465	88.1	79.7	512	104.5	110.5	534	515	478
ねぎ	1,032	116.5	110.0	385	90.6	90.4	394	377	382
レタス類	883	115.2	81.6	283	95.9	127.6	287	283	276
きゅうり	1,045	106.3	98.2	423	106.5	110.9	465	387	406
なす	455	109.0	113.4	451	105.6	100.6	474	461	418
トマト	1,390	103.1	107.8	368	106.4	104.5	361	364	382
ピーマン	277	104.7	88.8	805	104.5	109.9	805	794	815
ざいごも	110	117.4	103.9	301	109.9	101.9	301	323	278
ばれいしょ	3,159	115.0	113.5	133	55.0	83.7	141	123	132
たまねぎ	5,444	153.2	114.6	125	59.8	103.7	123	128	125

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

類別	品目	2月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>鹿児島産を中心に、主力の徳島産、長崎産、和歌山産、香川産などの入荷があった。各産地とも天候の変化の影響を受けながらも、比較的安定した出荷が続いた。全体ではそれほど入荷量の増減もなく、旬を追うごとに微減傾向ではあったが、月間全体では入荷量が少なかった前年をかなり大きく上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>気温上昇に伴って需要が伸びず、単価安での推移となった。入荷減量に伴って下旬には回復が見られたが、月間では前年を大幅に下回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
	にんじん 	<p>鹿児島産が中心となり、他に長崎産の残量入荷などがあった。各産地とも月の初めは順調な入荷があったが、雨が少なく干ばつの影響もあって小玉傾向で、出荷量が伸び悩んだため減量となった。全体でも旬を追うごとに減量となったが、月間では前年並みで、平年をわずかに上回った。</p> <p>価格は前月末の上昇傾向から高値のスタートとなった。小玉傾向の影響もあり、旬を追うごとにわずかに低下となるも、品薄感から高値推移が続き、極端な単価安だった前年を大幅に上回り、平年をやや上回った。</p>

葉茎菜類	はくさい 	<p>茨城産が中心となり秋冬産地の主力の愛知産や兵庫産、九州産の秋冬物の残量入荷に加え、下旬には九州産の春物の入荷も始まった。主力の愛知産が1月末の寒波の影響により生育が遅れたことに加え、中旬以降も冷え込みから出荷量が少なく、特に下旬が落ち込み、月間でも前年を大幅に下回った。茨城産と九州産の残量については品質が悪く、一部量販店では春物へと移行する動きも見られた。全体としては旬を追うごとに入荷減量となったが、月間では前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>価格は入荷減量に伴って旬を追うごとに上伸傾向となり、下旬には春物への切替えが見られたことで、残量出荷ものの品質低下による安値を回避し、高値のまま推移した。適度な寒さから需要もあり、月間でも前年をかなりの程度上回り、平年並みとなった。</p>
	キャベツ類 	<p>寒玉キャベツ、春キャベツとも愛知産が中心となった。1月末の寒波の影響が残り、2月に入ってからも低温と干ばつの影響により玉太りが悪く、全体としても大玉の比率が低かったため、重量が伸びず入荷量も伸び悩んだ。月間全体の入荷量は少なかった前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>価格は末端の荷動きが悪く、引合いが弱い状況が続き、全体としても旬を追うごとに微落傾向となった。月間では前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>徳島産と福岡産が中心となる入荷であった。各産地とも1月下旬の寒波の影響もあり、2月に入ってからも気温低下による生育不良の影響が続き、出荷量が伸び悩み減量となった。全体としても旬を追うごとに減少傾向で、月間でも前年をかなり大きく下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>量販店での末端売値が高い上に、品薄感から高値推移が続いたが、単価高により売れ行きは悪く、徐々に発注量が減少したため販売には苦戦した。旬を追うごとに下落傾向となり、月間では前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	ねぎ (白ねぎ) 	<p>群馬産を中心に、主力の鳥取産や静岡産などの入荷があった。各産地とも月の前半は順調な入荷を続けたが、中旬に日本海側や山間部での降雪の影響により集荷減となったところもあり減少した。下旬には回復傾向となり、前年をかなり上回ったため、月間全体では前年を上回った。</p> <p>前月までの単価高のイメージが残り、同じ鍋食材のはくさいやキノコ類の価格が高かったことから需要は伸び悩んだ。価格も伸びず前年を下回った。</p>
	ねぎ (青ねぎ) 	<p>青ねぎは徳島産を中心に高知産など、細ねぎは高知産と静岡産を主体として、各産地の入荷もあった。1月下旬の寒波の影響も残り、2月に入っても気温低下による生育不良から産地出荷量は増えず、入荷量も全旬とも伸び悩んだ。月間全体でも前年をかなり下回った。</p> <p>業務筋や学校給食などの需要も高く、発注量は多かったため、全体的な品薄感も相まって単価高での推移となった。月間でも前年を上回った。</p>
	レタス類 	<p>ラップものは主力の徳島産、香川産、兵庫産の入荷が主体となり、裸ものは長崎産が中心となった。各産地とも1月下旬の寒波の影響が残り、生育が進まずに出荷量も伸び悩んだ。サニーレタスとリーフレタスは福岡産が中心となる入荷であった。レタスの入荷量が伸び悩んだため、非結球ものでの特売が量販店で組まれたこともあり、産地への要請が増えたことで増量となった。レタス類全体では、極端な品不足で入荷量が少なかった前年をかなり大きく上回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>前年が、レタス類全般が高値だったため、レタスの価格は前年をやや下回ったが、サニーレタスとリーフレタスはレタスの入荷量不足により特売が組まれたことで引き合いも強く、高値安定での推移となった。レタス類全体では高かった前年をやや下回り、平年を大幅に上回った。</p>
果菜類	きゅうり 	<p>宮崎産を中心に高知産と徳島産の入荷があった。各産地とも生育は順調で、月初の節分需要に加えて量販店での特売や学校給食の需要も重なり、月の前半は入荷増量となったものの、反動もあり旬を追うごとに減量となった。月間全体では前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>上旬に引き合いが強まったことで単価高となり、前年をかなり上回ったが、中旬に反動で下落した。下旬には入荷減量により上伸となり、月間では前年、平年ともかなりの程度上回った。</p>

	 <p>なす</p>	<p>千両系は高知産が中心となり、長茄子は福岡産と熊本産が主体となった。月の初めは安定していたが、中旬にかけて低温により出荷量が減った。下旬には回復傾向となったが全体的には伸び悩んだ。しかしながら月間全体では前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく上回った。</p> <p>価格は、量販店の消極的な販売が続いて売場も狭く、旬を追うごとに下落傾向となった。月間では前年をやや上回り、平年をわずかに上回った。</p>
	 <p>トマト</p>	<p>愛知産と熊本産が主体となり、福岡産の入荷もあった。各産地とも大玉傾向で、生育も順調で産地出荷量が多く、上旬から中旬にかけては増加傾向が続いた。下旬には大玉傾向もやや落ち着きが見られたため、やや減少したが、月間全体では前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>価格は特別な増減もなく、前月から引き続いて安定した推移が続いた。月間では前年をかなりの程度上回り、平年をやや上回った。</p>
	 <p>ピーマン</p>	<p>宮崎産と高知産が主体となる入荷であった。高知産は旬を追うごとに減少傾向となった。宮崎産の出荷量は比較的多く、月の前半は増加傾向であったが、地元の単価高の影響により後半は出荷控えが生じて減量となった。月間全体では少なかった前年をやや上回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>価格は量販店で高値販売が続いたこともあり、堅調な価格での推移となった。月間では前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
土物類	 <p>さといも</p>	<p>愛媛産が中心となる入荷であった。他の産地は切り上り入荷量は旬を追うごとに減少傾向となった。輸入の中国産の入荷もあったものの、重油高や円安の影響もあり、現地価格も高かったため、国産との価格差がほとんどなく量は前年の半分以下であった。それでもコロナ禍が落ち着きを見せ始めたこともあって、業務需要回復の兆しもあり、需要が高まり月間全体では前年大幅に上回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は輸入の中国産の単価高によって国産との差がほとんどない上、業務関係の引き合いが強まったことから、全体的に高値での推移となった。量販店での荷動きは悪かったものの、月間では前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに上回った。</p>
	 <p>ばれいしょ</p>	<p>丸芋は鹿児島産の新物の入荷と北海道産の残量入荷が共に主体となった。北海道産は計画的な出荷で安定した入荷が続いた。下旬には残量減少もあり減少となったが前年を大きく上回り、月間でも少なかった前年を大きく上回った。鹿児島産は本土物の出荷が順調に始まったことに加え、離島物も本格的な出荷時期となり、増量となった。メークインは北海道産が中心となり、計画的な出荷が続いたため大きな増減もなかったが、気温の上昇と下降が大きく、休眠打破による発芽の問題が多く発生したため、買い控えも見られた。ばれいしょ全体では月間では前年、平年ともにかかなり大きく上回った。</p> <p>メークインは発芽の影響により買い控えが生じたことで価格は伸び悩んだ。全体としては、極端に入荷量が少なく高値が続いた前年を半値近く下回り、平年を大幅に下回った。</p>
	 <p>たまねぎ</p>	<p>北海道産が中心となり、兵庫産の若干の残量と、長崎産の新たまねぎの入荷が始まった。北海道産は前年度が大不作であったが、本年度は平年並みの安定した出荷量が続いた。長崎産も例年に比べると順調なスタートとなったが、中旬の寒波の影響により月の後半に減量となった。月間全体では前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく上回った。</p> <p>価格は、極端な単価高の前年を大幅に下回り、安定した推移であったため平年をやや上回った。</p>

(執筆：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした4月の見通し

2月以降、3月初め頃まで全国的に天気は安定し、主産地である愛知産、千葉産、神奈川産などのキャベツは順調であった。それでも3月初めに聞いた市場仕入れの小売商の「市場価格は底堅い」という声のように、価格は平年並みかやや高めであった。

4月は、九州産の春ばれいしょや豆野菜が少

ないと予想されるが、その他はおおむね順調な生育となっている。例年3～4月は砂嵐を伴う強風、なたね梅雨、寒の戻りなど、野菜の生育の混乱要因となるリスクもいくつかある。各品目ともに春野菜となり、産地も交代の時期を迎える。各産地とも遠隔の他産地の動向を見ながらの出荷となる展開が予想される。価格は引き続き前年をやや上回ると予想される。



根菜類

だいこんは、千葉産（東葛）の内陸の産地は、春だいこんは3月20～25日に始まると予想している。例年よりやや早めで、ピークは4月下旬から5月いっぱいまでで、作付けは微減と予想している。同産（ちばみどり）は前年9～10月に前倒しで出荷され、12月～翌1月が少なめとなった。2月には計画に戻り、3月下旬～4月上中旬に最大のピークを迎えると予想される。3月に入り干ばつの影響も心配されるが、生育そのものは順調である。

にんじんは、静岡産はほぼ例年と同様、4月3日頃から始まり、ピークは4月15日～4月いっぱい、5月上旬までの出荷と予想される。作付けは前年の95%、品種は「ベータリッチ」で2Lサイズ中心である。徳島産は東京市場には例年より4～5日早い、3月10日過ぎから出荷が始まると予想している。出荷のピークは3月20日頃から5月上旬までで、作付けは微減であるが、生育順調で出荷は前年の105%と予想している。中心品種は「彩誉」である。



葉茎菜類

キャベツは、愛知産は2月下旬の時点で前年の93%の出荷実績となっているが、一昨年比では101%であることから、やや小玉傾向であることが影響している。3月いっぱいまでピークが続き、4月に入り減りながら推移すると予想される。下旬には端境となり、5月の連休明けから初夏キャベツとなって再び増えると予想される。4月の品種は冬系が70%で、中心品種は「冬のぼり」である。千葉産の春キャベツは3月中旬から徐々に増えて、4月に入りピークとなると予想される。生育は順調で平年並みに推移し、5月上旬には少なくなってくると予想される。神奈川産の「金系201号」は4月にピークを迎え、干ばつが心配されたがその後

の降雨と温暖な天候で生育が追い付いた。例年並みのLサイズ中心で、ほぼ平年並みの出荷が予想される。

はくさいは、茨城産は3月いっぱいまで秋冬物が残ると予想され、春物は4月から始まって4月下旬から5月5日頃にピークと予想される。生育は順調であるが、前年よりやや少なめと予想している。

ほうれんそうは、埼玉産の生育は順調で、4月も前年並みの出荷と予想される。群馬産（藪塚）の露地物は既に終わり、ハウス物となる。県内の他産地は切り上がってくるが、当産地は5月いっぱいには量的にまとも出荷できると予想される。その後も通年栽培の農家からの出荷が続く。今シーズンは天気が良く、前進しても谷間なく出荷できている。4月以降に減るタイミングもあるが、播種が滞ることなく、量的にも平年並みを予想している。

ねぎは、茨城産は3月に入り春物が始まって秋冬物の残量と併売されたが、4月には春物のみとなるであろう。出荷は平年並みと予想され、少な目であった前年より多い。2L・Lサイズ中心と順調である。千葉産の現状は秋冬物の最終を迎えているが、3月20日には春物も始まってくる。秋冬物は3月31日まで、春物は5月20日まで、初夏ねぎは4月20日頃から始まると予想される。いずれも生育順調で、前年を上回る出荷が予想される。

レタスは、香川産は現状、出荷のピークを迎えており、4月も引き続き一定のペースで出荷され、5月の連休明け頃に減ると予想され、ほぼ平年並みの状況である。茨城産の生育は順調で、3～4月がピークとなる見込みである。現状は干ばつの影響でLサイズ中心であるが、気温は高め、干ばつが解消されれば今後肥大すると予想される。長野産の出荷は4月20日のグリーンリーフから始まり、22日にサニーレタス、24日に玉レタスが始まると予想される。5月いっぱいまでピークで、6月には若干減ってくると予想される。産地は塩尻市の標高700メートル地帯であり、10年前に比べると出荷ペースは早まっており、地球温暖化の影響ではないかと考える。

果菜類



きゅうりは、群馬産は3月15日頃に出荷のピークと予想されるが、好天が続き、干ばつ気味で、4月もピークが続くと予想している。埼玉産の加温物は2月16日から始まり、ピークは4月上旬と予想される。無加温物は2月25日からで、5月の連休を挟んだ4月下旬から5月上旬がピークと予想される。天候に恵まれ生育は順調で、作付けも前年並だが、朝晩の寒さがきつくやや遅れる可能性もある。宮崎産は天候に恵まれ、現状も順調な出荷が続いている。3月末頃から4月にかけて一旦ピークを迎え、6月いっぱいくらいまで出荷できるが、4月としては前年並みの出荷と予想される。

なすは、高知産の現状は増量期を迎えており、天候に恵まれ病気の発生もない。3月中下旬にピークとなり、そのまま4月中旬まで横ばいで多い見込みである。今後の天候にもよるが、4月下旬からさらにピークが来ると予想している。新品種「PCおりょう」（単為結果）は秀品率高く、結果を残している。4月は前年を上回る出荷と予想している。福岡産の現状はやや少なめの出荷となっており、寒波や成り疲れもあるが、寒暖差の激しさが最も影響している。今後気温の上昇とともに回復が期待できるが、急激でなく緩やかな回復と予想される。例年のピークは5月であり、4月は前年を下回ると予想している。

トマトは、熊本産は極端な寒暖差などの影響で現状は少なめである。3月は一定のペースで出荷され、4月に入り本格的に増量し、ピークは5月中旬頃を予想している。愛知産の長段栽培（長期間収穫を続ける栽培法）は、夏の高温の影響により根の張りが悪く、さらに低温の影響で現状は少なめである。植替え物が3月下旬に始まって増えては来るが、4月とすれば前年をやや下回ると予想される。前年並みのMサイズ中心である。佐賀産の「光樹とまと」は前年並みで、生育は順調であり、4月にピークを迎えて6月いっぱいの出荷と予想される。

ピーマンは、高知産の生育は順調で、出荷は4月がピークと予想され、5月いっぱい多いが、

やや早めに推移して前年を上回る量と予想している。茨城産の春物は、冷え込みもあって現状の出荷は鈍いが、今後徐々に増え、前年並みに追いつくのは4月下旬を予想しており、4月としては前年を下回ると予想される。宮崎産は昨年9月の台風で植え替えたり、栽培を止めたりした生産者もいた。そのため今シーズンは前年を下回る出荷が続いているが、天候は悪くないため生育は順調に来ている。3月20日頃から増えてきて、そのまま大きなピークはなく5月まで出荷は続き、6月に入り切り上がると予想される。



土物類

さといもは、埼玉産は貯蔵物で、4月も前年より少ないが前年より多い。計画では中旬いっぱいとしている。

ばれいしょは、鹿児島産（いずみ）の春ばれいしょは、4月10日前後から始まり、20日から5月の連休にかけてピークと予想される。寒波の影響により2週間から20日程度の遅れとなっている。出荷が早い地域からの物は遅れるが、中間から後半物が減収をカバーすると予想している。早春ばれいしょは、3月上旬の販売で終了する。同産（きもつき肝属）は大隅半島の産地で、東京市場への出荷は3月に入ってから始まり、ピークは4月中下旬と予想される。積雪の影響から20~30%の減収を予想している。長崎産は1月24日に降雪による寒害を受け、本来4月下旬から出荷できる早い物がほとんど出荷できないと予想される。それらが5月の連休明けになってから始まるため、ほぼ2週間の遅れが予想される。北海道産の「男爵」は4月中旬までの出荷計画であるが、前年の120%と多い見込みである。

たまねぎは、兵庫産は1月の気温が低く、遅延が心配されたが、その後は温暖で推移し回復している。ほぼ前年と同様のペースで、早生のピークは3月下旬~4月を予想している。5月は中生で、現状は病虫害もなく順調で、Lサイズを中心に前年並みと予想している。静岡産の本年産は雨が少なく、小玉傾向に仕上がっている。生育が遅れていることもあり不作気味であ

る。4月は3月よりも減ってくるが、生育遅れにより前年を上回り、5月まで出荷されると予想される。



その他

ブロッコリーは、香川産の現状は秋冬物のピークであり、4～5月まで春物となり、生育は順調である。熊本産は2月にピークとなったが、4月もまとまった数量が出荷でき、5月に入り減ってくると予想される。生育は順調である。愛知産の現状は大きなピークは終わり、3月は少なくなってきた。4月以降の春物もほぼ現状と変わらないペースで推移し、量的には前年並みと予想している。埼玉産の現状は秋冬物は終盤に入り、3月中旬は谷間となる。春物の早い物は3月下旬から、4月に入って本格化し中旬にピークを迎え、5月上旬までと予想される。

アスパラガスは、栃木産は3月中下旬から徐々に増えると予想している。4月に入ってピークとなり、5月の連休頃まで続くと予想される。佐賀産は3月上旬がピークで、15日頃にはかなり少なくなり、4月は立茎作業に入る。5月に入り立茎物が揃って再び増えると予想される。現状は寒さにより出足は鈍いが、株は充実している。

グリーンピースは、鹿児島産は4月10日頃から本格出荷を予想しているが、寒波の影響が大きく、30%程度の減収を予想している。

そらまめは、鹿児島産が4月末から5月上旬いっぱい位で、ほぼ例年並みの出荷ペースを予想している。寒波の影響で例年により10～20%の減収を予想している。

さやいんげんは、沖縄産の通常は2月下旬に一度ピークが来るが、今年は3月20日前後に最初のピークが来ると予想されている。4月も一定の出荷があると予想しているが、虫害も報告されている。4月としては前年を下回ると予想している。

えだまめは、千葉産のハウス物は例年と同様に4月20日頃から始まると予想され、ピークは5月の連休頃と予想している。作付けは生産者の高齢化により若干減少している。

セロリは、茨城産は3月が出荷のピークであり、価格安から出荷は鈍めである。天候に恵まれ生育は順調で、5月の連休明け頃まで出荷は多い見込みである。静岡産の3月は例年少くなる時期であり、4月に入り再び増えると予想される。生育は順調で、ほぼ平年並みの出荷が予想される。5月10日～15日頃には長野県産に切り換わると予想される。

かんしょは、千葉産は「紅高系」の貯蔵物の出荷で、4月中旬までと予想される。量的には前年並みである。徳島産の「鳴門金時」は5月いっぱいの出荷であり、22年産はやや豊作で平年を上回ると予想される。

メロンは、茨城産の「オトメメロン」は4月5日から、「アンデスメロン」は4月中旬から、「クインシーメロン」は4月20日前後からと予想している。生育は順調である。

すいかは、熊本産はほぼ周年の出荷体制であるが、3～4月と徐々に増えると予想される。最大のピークは5月であり、4月下旬には2玉サイズ中心になると予想され、品質は例年どおり安定している。重労働のため作付面積の減少傾向は続いているが、もう一段価格が高くなれば新規参入もあると思われる。

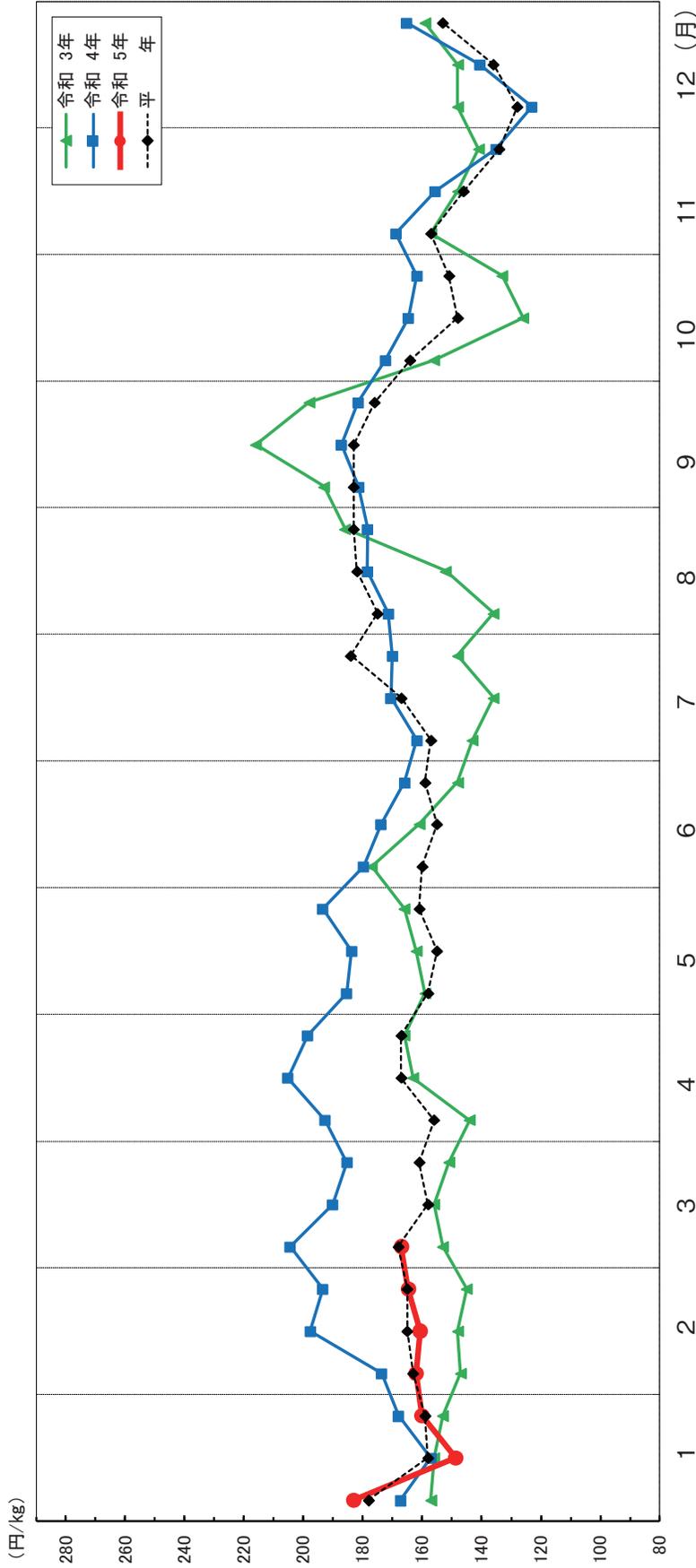
たけのこは、千葉産は2月20日から始まっているが、今年は表年で多く出荷できると予想している。出荷のピークは4月中下旬で、5月の連休頃には切り上がると予想される。2キログラム箱、4キログラム箱での出荷と予想される。石川産は例年並みに4月10日頃から始まり、4月末から5月初め頃にピークがあり、月上旬までと予想される。裏年のためかなり少ない出荷と予想される。

山菜は、山形産のうるい、たらの芽ともに3月がピークで、4月は減りながら推移し5月初め頃までと予想される。量的には前年の90%と少ない。いずれも生産者の高齢化の影響によるが、たらの芽は前年の長雨により木の状態が悪いことも影響している。

(執筆者：千葉県立農業大学校

講師 加藤 宏一)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	下旬																																		
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	159	162	166	177	161	148	143	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148	148	159
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165
令和5年	183	149	160	162	161	165	167																													
平	178	158	159	163	165	165	168	158	161	156	167	167	158	155	161	160	155	159	157	167	184	175	182	183	183	176	164	148	151	157	146	134	128	136	153	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（平成29年～令和3年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。